丹波市人権・同和教育協議会

人権ネットワーク たんば

第42号

発　行　丹波市人権･同和教育協議会
〒669-3309
事務局　丹波市柏原町柏原3619
TEL･FAX 0795-72-2770
e-mail　jinken@tambashi-doukyou.jp

中学生の主張　人権作文最優秀作品

丹波市人権・同和教育協議会（市同教）では、市内の中学生から人権作文を募集し、最優秀作品は市同教広報紙「人権ネットワークたんば」に掲載する取組を市同教発足時から継続して行っています。本年度も、市内全中学校全学年から20点の作品応募があり、中学生の人権意識の深まりと人権教育のひろがりを感じました。選考の結果、春日中学校３年金川大哲さんの作文が最優秀賞作品に選ばれました。

今後も日本の高齢化は進むと予想され、ここ丹波市でも、20年後には15歳未満の若者世代は約30%減少するのに対し、75歳以上の後期高齢者は20%増加すると予測されています。高齢者が生き生きと暮らせる地域社会にするため、高齢者の人権についての関心と理解を深めていくことが必要となってきます。本年度の最優秀作品は、次代を担う中学生が、身近な体験をもとに高齢化社会に関心をもち、自分の考えをまとめた人権作文です。

高齢化社会で大切なこと

春日中学校３年　金　川　大　哲さん

「家内の皆さんへ　感謝の言葉」と書かれた封筒を僕はそっと紙袋から取り出した。中には、５人家族全員の名前が書いてあり、これまでの感謝の言葉とこれからも元気で仲良く楽しく過ごしてほしいとの願いが書いてある。今年３月に他界した曾祖母からの手紙だ。葬儀の準備をしている時に、叔母さんが離れの曾祖母の部屋のタンスの中から見つけてきてくれた。親戚が多かったため、封筒はいくつかあった。葬儀の前に、みんなでその手紙を涙しながら読んだ。その時は、悲しさでいっぱいだったのを覚えている。あれから、半年ほどたって、初盆の準備をしている時に仏間の紙袋からそれを取り出して読み返してみた。さみしい気持ちに変わりはないけれど、前よりは少し落ち着いて読めたと思う。そして、久しぶりに曾祖母の優しさや温かさにふれたような気がした。

僕は、小さいころから、周りに大人や父方、母方を含めて祖父、祖母、曾祖母に囲まれて育った。だから、高齢者問題や介護には、関心がある。紙袋の中には、曾祖母の書いた手紙の他に色々なものが入っている。それらを読み返しながら、曾祖母のことを含めて高齢者の方との関わりについて人権作文を書いてみようと思った。

曾祖母はいつも優しくて穏やかな人だった。とても元気で百歳まで長生きした。けれども、２年ほど前に心臓の病気が見つかってから、入退院を繰り返していた。それでも、退院して家にいる時は、耳が遠くて腰は曲がっているけれど、畑の草を引いたり、色々してくれたりしていた。

一緒に住んでいた祖父は２年前に他界していたことと両親は共働きのため、曾祖母のお世話は僕の祖母が中心になってしていた。世間では、「老老介護」というらしい。祖母自身も膝の痛みや持病があったりして、なかなか大変だったようだ。僕は祖母にもいっぱい感謝しないといけないことがある。だから、たいしたことはできないけれど、祖母の負担が少しでも軽くなるように僕は重いものを持ったり、祖母の代わりに時々曾祖母の様子を見に行ったりするようにした。学校から帰った時や、休みの日の昼ごはんの時など、ちょっと様子を見に行ったりした。僕が行くとすごく喜んでくれた。耳が遠いので、耳元でゆっくりと話をするように心がけた。また、大事な伝言を頼まれた時は、メモで筆談をするようにした。伝わるといつも安心した顔をしてくれた。それでも、少しすると、「大丈夫やから、はよ、勉強してきなよ。」と言ってくれた。

僕の家には、時々、ケアマネージャーの方が来られていた。祖母はその人から色々とアドバイスをもらったりしていたみたいだ。また、週に１回曾祖母はデイサービスに行っていた。高齢者の介護は家族だけでは、とても大変だし、色々な知識も必要だ。デイサービスでは、車いすごと乗れる大きなワゴン車で迎えにきてもらい、介護士さんが、お風呂に入れてくれたり、レクリエーションをしてくれたりして、他の高齢者の方とも交流を持つことができるらしい。健康状態もきちんと見てくれる。祖母が連絡帳のようなものにこまめに曾祖母の様子を書いて交換しているのを見たことがある。こんなふうにして、高齢化社会で介護が行われているんだなあと思った。

昨年暮れに、曾祖母が心臓発作を起こしたことがある。曾祖母は意識がもうろうとしていた。そばには、僕と祖母しかおらず、「救急車を呼んで！」と言われて生まれて初めて救急車を呼んだ。ドキドキしたけれど、落ち着いて必要なことを伝えることができた。祖母は慌てながらも、保険証やお薬手帳など病院に持って行く大事なもので普段から準備していたものを持ち、救急隊員の人を迎えた。僕は、両親に連絡した。今から思えば、祖母のように備えをしておくことも大切だったと思う。

病院に着いて、意識を取り戻した曾祖母は「ありがとう」と何度もお礼を言ってくれた。

ここまで、色々と振り返りながら、思った。当たり前のことだけど高齢化社会において、「言葉と行動って大切だな。」ということだ。言葉は人と人をつなげる。人と福祉、人と医療、人の命もつないでくれる。行動も同じことだ。

言葉と行動でつながっていけるような人に僕もなっていきたい。そう思いながら、曾祖母の思い出がいっぱいつまった紙袋から１枚の色紙をとりだした。曾祖母がデイサービスで百歳の誕生日を祝ってもらった時に詠んだ歌だ。

「おぎゃあと生まれて　やっと来ました百歳が　感謝　感謝の　旭日（あさひ）が昇る」

第70回 全国人権・同和教育研究大会　滋賀大会

11月17日（土）・18日（日）滋賀県大津市等を会場に開催されました。「淡海（おうみ）から　つながる　ひろげる　ヒューマンネット」という地元テーマのもとに、49年ぶり３回目の全国大会開催となりました。本大会には、地元特別報告をはじめ、全国から学校教育と社会教育の分科会に104本の実践報告が寄せられました。それぞれの報告は、子ども・教職員・保護者・地域の人々が喜びや苦しみ、怒りや悩みを共有し、創り出してきた生きた記録であり、どのような課題に向き合い、何に気づき、学び、どのように変わったのかを、明らかにしてくれるものでした。丹波市からは15名が参加しました。参加者各自がこの大会で得られた学びと気づきを持ち帰り、学校・職場・地域の中でひろげていくことを確認しあいました。参加者の感想を紹介します。

参加者の感想

●今回の全同教の大会に参加することで、少し自分の考え方の幅が広がったように思います。特に、中学校現場で働いている多くの先生方の報告を受け、さまざまなアプローチを知ることができました。たくさんの報告を受けましたが、すべてに共通していたことは、一人一人の生徒を大切にすることだと感じました。私自身、生徒を自分の価値観や固定観念で見ていることがあると思います。そうすると決めつけた指導や支援しかできなくなり、本当の意味でその生徒に関わっていることにはならないと気づきました。生徒の行動には必ず何かの要因があるので、そこにしっかりと向き合い、ともに成長していきたいです。教師としてまだまだ未熟ではありますが、今回の大会で自分が大切にしていかなければならないことが、少しはっきりしたと思います。貴重な機会をありがとうございました。

●はじめて全国人権・同和教育研究大会に参加させていただきました。小学校や中学校の人権教育についての報告を聞いたのは初めてで、小・中学校での丁寧な取り組みや一人一人との向き合い方・支援の様子を知り、自分の取り組み方を見つめなおす機会となりました。義務教育の９年間の人権教育の大切さ、高校との連携がとても大切であること、そのために私たちも学び続けていかなければならないと思いました。

●今回、初めて全国大会に参加しました。行政に携わるものとして人権尊重は基本であることをしっかり意識しなければならないと改めて認識する機会となりました。各報告とも、これまでの実体験やその時の思いを当事者の言葉で聴くことができ、またその報告に対して感想を述べ、質問する人の考え方、感じ方にも接することができました。会場に入りきれないほどの多くの参加者で、人権・同和教育に対す真剣な姿勢を体験する機会となりました。時間はかかるかもしれませんが、このような参加者の思いが一歩ずつでも成果につながるものと感じました。